

46、古墳時代後期の 竪穴式住居址群 ——余呉町桜内遺跡

北陸自動車道関連の余呉町桜内遺跡では、昭和53年度の発掘調査により古墳時代前期・後期の方形周溝墓、古墳時代後期の円墳・甕棺墓及び竪穴式住居址群等の各遺溝が検出された。今年度も調査は続行中で、詳細な検討はできないが、一群の住居址群について概要を紹介したい。

桜内遺跡は、伊吹山地の北西端を成す山麓から、西方に徐々に流れ出した土砂が形成する扇状地上に位置する。北東の尾根上には黒田長山古墳群（注1）、東南の尾根上には黒田長野古墳群（注2）が、当遺跡を見下すかたちで対峙している。西方に目を転ずれば余呉川を隔てて賤ヶ岳・大岩山がそびえ、ここにも黒田古墳群（注3）等の各遺跡が点在する。当遺跡はこれらの古墳群が位置する尾根により形成された扇状地のほぼ中央に位置し、傾斜の緩やかな平坦地に竪穴式住居址を中心とする集落が営まれていたように見受けられる。

現在までに確認されている古墳時代後期の竪穴式住居址は40棟を数え、54年度以降の調査によってさらに数を増すものと思われる。また、この住居址群の下層にはさらに時期の古い竪穴式住居址（住居址内にカマドをもたず、須恵器も伴わない）が相当広範囲に遺存することが確認されている。

さて、古墳時代後期のこの竪穴式住居址群は大きく二群に分かれることが判明した。一つは黒田長山の尾根が終わる平地に営まれた一群（A群=11棟）であり、他方は扇状地中央部付近に営まれた一群（B群=29棟）である。この二群が湧水流を挟んで約100mの隔たりをもって存在する。

A群

A群の各住居址は、SB-3と4とが切り合うのを除いてそれぞれ独立して存し、平面形態が長方形（南北にやや長い）か正方形を呈し、方位もほぼ一致し、住居址内に設置されたカマドの位置も東南隅に統一されている。又、住居址床面上及び埋土中より検出される遺物もおおよそ近似した時期（6世紀後半～7世紀前



余呉町桜内遺跡位置図

半)を示している。このことからA群はほぼ同時期に存在した一群の住居址群とみなすことができよう。A群に属する住居址は、旧国道365号線の下からも検出されている（SB-11）が、国道の西側からは検出されず、増えてもあと数棟で群をなしていたと思われる。さきほどA群に属する住居址間には統一性があると述べたが、各住居址を詳細に見ると若干の差異がみられる。SB-1・2・4・5は小型の住居址であるのに対して、SB-3・10・11は比較的大型で、住居址内床面に柱痕を有し（SB-10・11）、壁面・カマドもしっかりした造りである。SB-11の東壁内側には、側板が立てられていたような痕跡も認められる。これらやや大きめの住居址は、その周囲の住居址に対して中心的な立場にあるもののように見受けられる。

B群

B群は、さらに二群に細別できよう。

B-a群はB群の中で北部に位置し、住居址の平面形態はA群ほどは四隅が鋭くなく、床面上に焼土の広がり確認されるものの、明確なカマドをもたない。柱が住居址内に立てられるものが多い（A群の大部分は住居址内に柱痕が認められない）。さらにSB-16～19、SB-20～21、SB-23～25のように切り合っている住居址がある。

存する住居址がある。

B-b群はB-a群の南方に広がり、その平面形態、カマドの位置、床面に柱穴がないこと等、その特徴はA群に共通するところが多い。又、B-a群とは方位が若干異なるが、これは地形の影響によるものと思われる。傾斜の高い方向に一辺を合わせたためであろう。B-b群中のSB-33~36は、隣り合う住居址同志が接近しすぎ、同時の併存は不可能なことから、これらの住居址群もある程度の時期差をもって建て替えがされたと思われる。

B-b群の各住居址内より出土している土器は長甕及び7世紀前半頃の須恵器片である。B-a群中のSB-24床面の焼土上より検出された甕は、長胴化の傾向は示しながらも未だ長甕には至らない甕である。一方、先述の如く住居址の構造はB-a群はB-b群より古い要素を示している。これらのことから、B-a群が3群の中で一番古く営まれ、数回の建て替えを行なって存続し、その間B-b群へと拡大あるいは移行していったことが伺える。このB-b群とA群との時期はほぼ一致する。

古墳時代の集落構成を考える場合、竪穴式住居及びそれに付属する井戸等の施設、さらに掘立柱建造物（高床の住居か倉庫）群を含めた住居域と生産活動の場、そして墓域を包括した生活空間全体を把握しなければならない。しかし、残念ながら今回の調査では調査範囲の関係から、竪穴式住居址群の大半のみが検出されたにすぎない。

A群では掘立柱建物群は層位の不明確さから竪穴住居址と同時期のものは明らかにできていない。B群ではB-a群の北方に掘立柱建物群（数棟分）が存し、B-b群にかけて南方にも掘立柱建物群が広がっていることが確認され、竪穴住居址群の中央にはほとんどなく、周辺それも低地側に存することが明らかである。

墓域については、A群住居址の周辺に、近江型長甕（注4）を用いた甕棺墓（単棺・合わせ口棺）が点在する。これらの甕棺として使われていた長甕には煤が付着しており、A群住居址内より出土する長甕片と同種のものである。つまり、A群住居址で使用していた長甕を、死者を葬る棺として転用したことが伺え、副葬品は皆無である。単棺墓の場合は板等で蓋をしたことが考えられる。甕棺墓は縄文時代以降行なわれていることが知られており、近江湖北でも杉沢遺跡（注5）において縄文晩期の甕棺墓が発見されている。又、弥生時代に九州地方で甕棺として用いられた甕は、その非日常的規模・使用痕跡のないことなどから、棺に用いることを目的として製作されたことが伺える。一方、当遺跡の甕棺の特徴は、時期的には古墳時代後期のものであり、①人体をそのまま収容できない程度の甕が

使用されている。②日常使用した甕をそのまま棺に利用している。③特に墓域を設定せず、住居址群の周辺に埋葬している点などがあげられる。④に関しては、53年度に調査された黒田長山遺跡において、この住居址群のすぐ東方斜面上に、火葬痕跡と思しき礫群遺構が検出され、その礫層の下には焼土・炭が存し、甕片等の遺物も出土した。これと（長）甕棺墓とを即座に結びつけることはできないが、時期的には近いことから、一旦火葬にふした後に甕棺墓へ再葬したと考えることも可能である。京都市東山では、方墳の主体部に棺として長甕が使用されている例（注6）もある。しかし、②の点や、甕棺の大きさから幼児棺とするのが妥当なところであろうか。

以上、昭和53年度の調査の結果、検出された古墳時代後期の竪穴式住居址群について簡単に述べてきた。竪穴式住居址のみの検出であり、集落全体を把握することはできないが、この時期の一つの集落（あるいは一集団）の在り方が伺えるように思う。

各住居址内にカマドをもち、各々独立して食生活を営む数戸~数10戸の単位家族が、その中の特定家屋を中心に一つのまとまりを形成する。そして、掘立柱群を倉庫とすれば、この倉庫群は集落の周縁部にかたまっている存在し、集落全体の管理のもとに置かれていたであろう。つまり、日常生活は個別的に行なわれても、生活全体からみれば、集団に規制されている様子が伺える。

54年以降は本年度調査区域の東隣地域を調査する予定であり、本年度検出遺構と関連する遺構が検出されると予想され、より遺跡の性格が明確になると期待できよう。（石原道洋）

（注1）昭和53年6月~11月の発掘調査により、弥生時代末期の方形周溝墓及び古墳時代中期の古墳群等が明らかにされた。

（注2）昭和53年9月の発掘調査により古墳時代中期の方墳、及び後期の横穴式石室をもつ古墳が明らかにされた。

（注3）『滋賀県遺跡目録』昭和40年 滋賀県教育委員会——分布調査の結果、11基の木棺直葬墳の存在が確認され、各々が周溝をもつ。

（注4）『宮司・十里遺跡発掘調査報告書』1977年 長浜市教育委員会 付論「いわゆる近江型長甕について」

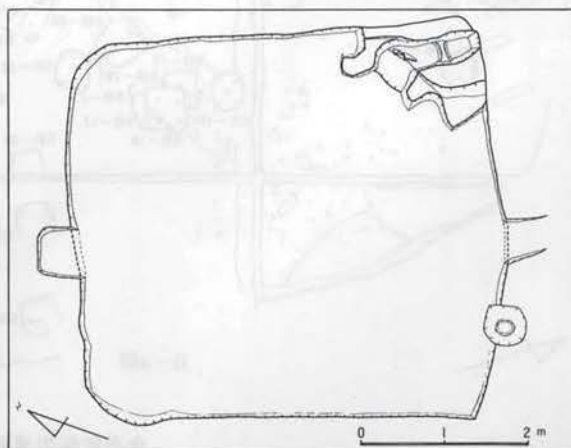
（注5）京都市東山花山火葬場群集墳中の方墳の1基。近江型長甕を横たえて四面を石で囲った主体部を有する。1977年 京都埋蔵文化財研究所調査。

（注6）『滋賀県史跡調査報告I』「有史以前の近江」1928年

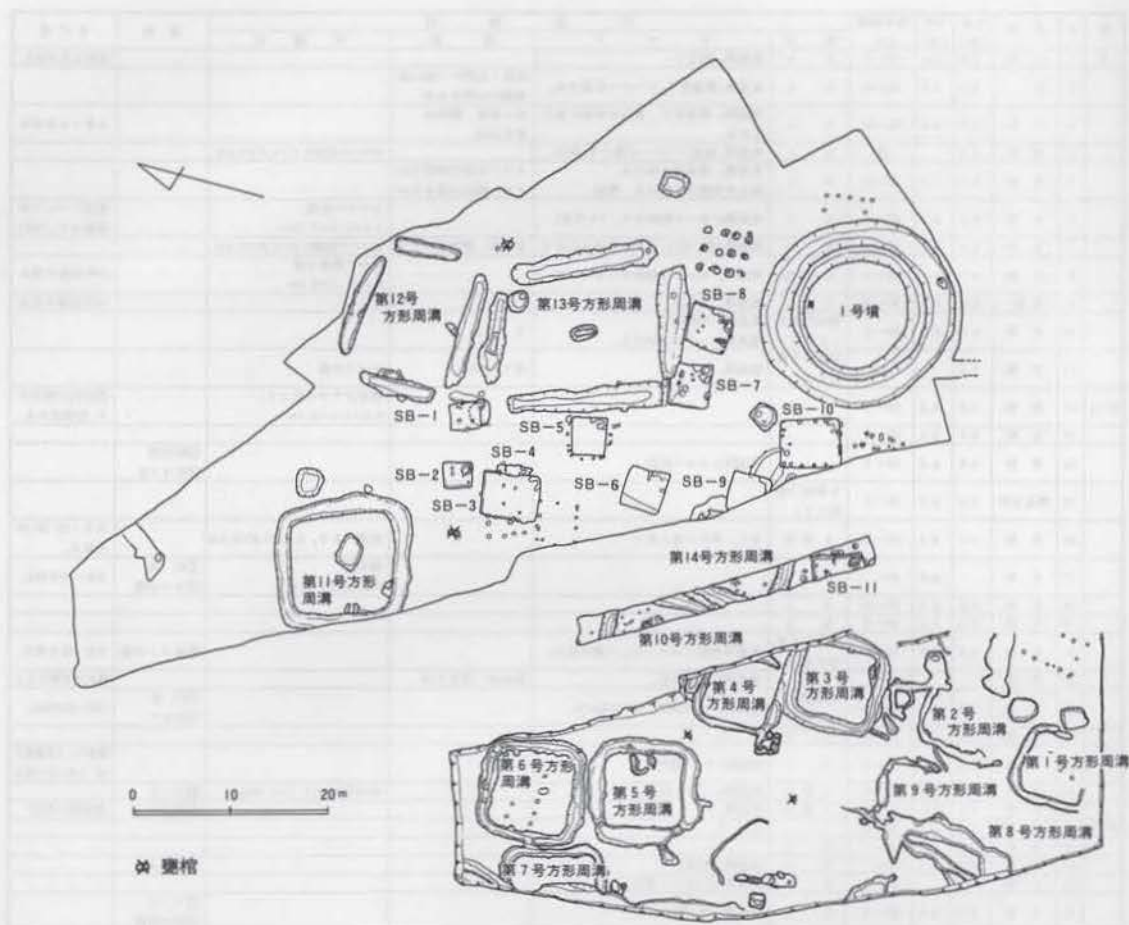
群	No	形状	S/N (m)	E/W (m)	残存深度 (cm)	内 容			遺 物	そ の 他	
						柱 穴	カ マ ド	周 溝			
A	1	方形	3.8	3.0	10-5	なし	東南隅、配石す。			宍形土壇を切る。	
	2	方	2.9	2.7	25-15	なし	東南隅、煙道有り、コーナーに抜ける。	西壁-北壁の一部に周溝幅20cm深さ5cm			
	3	方形	5.8	5.2	50-35	なし	東南隅、煙道有り、焚口の手前に焼土広がる。	北-東壁 幅20cm 深さ10cm		SB-4を切る	
	4	方形	3.4	15	なし	東南隅、煙道コーナーに抜ける、配石。		カマドの北側1.2×1.6×0.1m			
	5	方形	3.5	3.9	20-10	なし	東南隅、煙道南に抜ける。焼土中央部まで広がる。配石。		カマド以外の内壁をめぐり、幅20cm深さ5cm		
	6	方形	4.2	4.3	40-10	なし	東南隅にカマド痕跡あり。(L字状)		カマドの西側 0.4×0.5×0.25m		西側にベッド状遺構あり。(5cm)
	7	方形	4.4	4.6	10-5	なし	東南隅、奥に配石、中央まで焼土広がる。	北-西-南壁をめぐり	カマドの西側0.5×0.6×0.3m		
	8	方形	4.3	4.1	20-5	4本柱	東南隅、カマドの輪郭はっきりせず。		カマド南側2段 0.7×1.2×0.3m		13号周溝を切る
	9	方形	4.3	3.8	30-15	なし	東南隅、L字状。				14号周溝を切る
	10	方形	6.0	5.0	20-5	壁の内側4-6本ずつ	東南隅、馬蹄形、煙道南コーナーに抜ける。	なし			
	11	方形	5.2	40		周溝の内側にあり	東南隅。	深さ約20cm	カマドの西		
B-a	12	方形	3.5	3.4	15-5				東壁よりやや北より。0.8×1.0×0.4m		部分的に削平され、形状変わる。
	13	方形	4.0	3.4	20-2						
	14	方形	3.6	4.2	10-5		東南隅にカマド痕跡				⑤杯底部 ⑩長カメ片
	15	隅丸方形	3.0	3.7	20-5	5本柱(4本柱+1)					
	16	方形	4.0	4.4	15-5	4本柱	なし。中央に焼土あり		西壁にあり。0.8×0.6×0.1m		SB-17.18.19を切る。
	17	方形	4.0	20-	なし				西南隅 0.8×0.6×0.2m	⑤杯身 ⑩カメ口縁	SB-19を切る。
	18	方形	3.2	4.0	30-10	なし					
	19	方形	3.5	5.1	20-5	なし					
	20	方形	4.5	4.0	15-5	南北に2本柱が立つ	西壁中央部にカマドらしい焼土存在。			⑩長カメ口縁	SB-21を切る。
	21	方形	5-				東北隅に焼土存在。	幅40cm 深さ5cm			西の大半削平さる
	22	方形	3.4	3.7	30-2	4隅壁近くに4本柱	北西隅ビットの東側に焼土が広がる。			⑤杯身 ⑩長カメ	SB-21を切る。
	23	方形	5.0	5.2	15-5	なし					
	24	方形	6.6	5.2	25-5	なし	西北隅にカマド痕跡。				東側ベッド状遺構(5cm) SB-27を切る
25	方形	4.8	4.3	20-5	4本柱	東南隅にカマド痕跡。		南中央0.9×1.1×0.15m	⑩カメ片 ⑩長カメ	東南隅に配石	
26	方形	3.8	(3.4)	20-5	3本柱	東北隅					
B-b	27	方形	2.6	2.6	20-5	なし					
	28	方形	2.8	1-	なし						
	29	方形	3.5	3.5	15-	なし	東南隅、配石。			⑩長カメ	
	30	方形	3.7	15-	なし		東壁中央にカマド遺跡				
	31	方形	4.5	4.4	20-5	なし	東南隅、奥に配石。			⑩カメ片 ⑤高台杯身	西側削平
	32	方形(?)	4.0	4.0	10-5	なし	東南隅、煙道南へ抜ける。			カマド内よりカメ出土、長カメ片	
	33	方形	5.0	4.6	25-5	なし	東南隅、煙道南へ抜ける。			⑤高台杯身 ⑩長カメ	
	34	方形	3.2	25-20	なし		東南隅、煙道南へ抜ける。				
	35	方形	3.7	4.0	10-	なし	東南隅。				西側削平
	36	方形	5-		なし		東北隅。				
	37	方形	4.2	5-	なし			周溝東壁を廻る幅20cm 深さ5cm		⑤杯底 ⑩長カメ片	西側削平
	38	方形	3.0	10-	なし		なし				西側削平
	39	方形	4.4	3.9	5-	なし	東南隅、煙道南へ抜ける。				
	40	方形	3.5	10-5	なし		東南隅、煙道南へ抜ける。				西側削平



▲SB-5



SB-33▶



余呉町桜内遺跡A群遺構図



余呉町桜内遺跡B群遺構図